

蓼莪堂吉雄元吉の新史料について

ミヒェル ヴォルフガング

研医会

18世紀末頃から19世紀初頭にかけて、長崎や江戸などから蘭学者が相次いで上洛し、当地の学者とともに上方蘭学を勃興させた。多くの人物に関する研究が盛んに行なわれているが、稲村三伯や小石元瑞らより早く、すでに寛政12〔1800〕年頃から京都の私塾・蓼莪堂で教鞭を執っていた吉雄元吉（号紫溟、別名王貞美）の類まれな功績は、十分に認識されているとはいいたい。

阿蘭陀通詞吉雄耕牛との関係を裏付ける資料はまだ見つかっていないが、「蓼莪堂」の名や、関連の写本に見られる肥前国式見浦での治療例、また蘭医「烈帰父」（Hermanus Letzke）や商館長「論部兒」（Hendrik Casper Romberg）とも交流があったことなどから、若き元吉が長崎で暮らし、出島商館への出入りを許された特殊な身分だったことがうかがえる。また、門弟が写した「蘭訳筌蹄」から、元吉と前野良沢との間に密接な交流があったと考えられる。文政5〔1822〕年版の『平安人物志』には、元吉の名が医家及び蘭学の部門に記載されている。高谷鹿介、岡崎文明、杉本直、山田恭、江尻成功、永谷部彰ら、元吉の門弟たちがまとめた文書として、「駄舌医言」（文化元〔1804〕年、所在不明）、「蘭訳筌蹄」（文化2〔1805〕年書、宗田文庫）、「蓼莪堂外科伝書」（文化4〔1807〕年伝授、京大富士川文庫）、「性僻候篇 吉雄紫溟先生口授」（杏雨書屋、京大富士川文庫）、「蓼莪堂方筌」（中野操文庫）、「蘭方油薬之書」（中野操文庫）、「大西医断」（所在不明）が報告されている。これらの文書に加えて、演者は、以下の書を手した。

- ・「遠西奇水抜粹」（成立年不明、半紙本、17丁）は32種の水薬、チンキの薬方及び機能を紹介している。利用に関する記述の至る所に元吉自身の経験や見識が見られ、「蘭医歇私的兒」（Lorenz Heister）や「耕牛」にも言及し、蘭語名の意味について説明したりしている。また、「drop van corea ninzing 朝鮮人參舎利別」という「度度毀字私」（Dodoneus）の「本草論説」からヒントを得た自家製のものもある。
- ・「蘭薬説」（三巻一冊、半紙本、84丁）は、門人杉本直が文化2年に作製した132薬種を取り上げた自筆本である。各薬の蘭語名、漢訳、和名並びに薬性を示した上で、主治及び機能について詳細に述べている。翻訳ではないが、底本としてドドネウスの『Cruydt-Boeck』が利用されているようだ。
- ・「蓼莪堂 巻木綿之図」（成立年不明、永原義写、半紙本、17丁）には、傷の縫合法及び各種包帯の図が列挙されている。ハイステルの『外科学』（蘭訳書『Heelkundige Onderwyzingen』）を大いに参照したことは一目瞭然である。同じくハイステルに基づく書に吉雄耕牛の「經帛法図巻」や大槻玄幹『繙縛図式』（文化10〔1813〕年序）があるが、傷の縫合法に関しては、ヨーロッパの外科書にも見当たらない独特の図が大いに注目に値する。
- ・「刺絡精義」（享和元〔1801〕年書、文化10〔1813〕年写、半紙本、49丁）は、蓼莪堂で成立し、京都の儒医鎌田鵬（曲肱庵）の私塾で写されたものである。その序文の表題「八刺精要」は、文政8〔1825〕年刊行の『八刺精要』と一致しているが、『八刺精要』が訳者らを「盤水大槻茂質翻訳、佐佐木知芳仲沢増訳、烏田通免智の参校」と記している一方、蓼莪堂の書は『Heelkundige Onderwyzingen』の受容史の再検討を促すような内容となっている：「羅烏斂私荷意私的兒著、王貞美元申 吉翻訳、大槻茂質子煥 申 補較」。

元吉は蘭書を自在に活用できる語学力に恵まれ、入手した情報を比較・検証し、麻酔薬などの新薬や縫合法を開発し、さらには癲癇の治療やしかるべき作業手順を踏んだ兎唇の手術を行なえるほどの実力者として流派を超えて認められていた。杉田玄白が「鵠齋日録」で元吉を「紫溟先生」と呼んでいるのも、単なる世辞ではなく敬意の表れと思われる。